



色使いの魔法使い

魔男耕太郎



Madan Koutarou

Bunroku's Factory

魔男耕太郎

2

色使いの魔法使い

ぶんろく

Bunroku's Factory

「あんたさあ、色目を使う魔法使いつて聞いたけど、そのちっこい目でどうやって色目を使うのさ。ははは」

魔男耕太郎の目の前には、全身を光り輝かせた女が座っている。年の頃は五〇歳ぐらいだろうか。光り輝くと言っても、蛍のように自分が発光しているわけではない。耳から首から指から、頭の前からつま先まで身体中を貴金属で飾りたてているからだ。ご丁寧に笑った口から覗く歯にも金歯、前歯にはダイヤが埋め込まれている。

魔男はよくもまあ、この姿で街を歩いて、暴漢に遭わないものだと感じしていた。

「私が使うのは、色目ではなくて、色です」

魔男は小さな目をしばたたかせながら答えた。

「なんでもいいけど、街の人間が、櫛の木屋敷のまおとこさんは、良く当たる占い師だっていったから、ものは試しとおもって手紙を出したんだけどさ」

「街の人の噂話を信じたい気持ちがあったからここにこられたんではないのですか。もし、いささかでもお疑いなのであれば、お帰りいただいて結構です。来て下さいとお願いしたのは私ではありませんから。それにお帰りになる前に申しあげておきますが、私は占い師ではなくて魔法使いです。もうひとつ、まあとこではなくて、まだんです」

「ま、ずいぶんと、傲慢なおっしゃりようね」

女は、テーブルの向こうの男を見つめた。

ドーナツを手に櫛の木屋敷に続く暗い坂道をぶらぶらと三〇分も登るあいだ、なんの恐怖も不安もなかった。だいたい、自分がどうしてこの坂道を知っているのかも不思議に思わなかった。導かれているような気分だった。

坂のてっぺんで振りかえると、春の暖かい空気のなかで街の明かりがゆらゆらと見えた。

ドーナツ荘とかかれた門を通りぬけてアパートの中に入り、階段を上る足取り

にも、ためらいはなかった。

だけど、魔男耕太郎と表札の掛かっているドアを開けたときに、初めて激しく後悔した。

ドアの向こう、裸電球の明かりの下に白タイツ姿に虹色のマントを肩にかけた男が立っていた。頭はぼさぼさだし、牛乳ビンの底みたいなのメガネをかけているし、肩には、妖精の人形なんか乗せている。

こんなところに来たのは、酔っていたせいだと思った。いや、いまでも酔っているに違いないと思った。頭を振って、こめかみをぐりぐりとやってから目を開けたが、状況は何も変わらなかった。

「信じたいといわれればそれまでだけど、仕事の帰りにコンビニに寄ったら、ドーナツを買って櫛の木屋敷へ行きなさい、って声が聞こえたのよね。気がついたらここにいたというわけ」

えー、お話の途中ではありませんが、ここで、魔男耕太郎さんのことを紹介させていただきます。

わたしは、魔男さんの部屋の居候、ネズミの文蔵です。一宿一飯の恩により魔男さんの秘書を任じております。ご臍肩のほどお願いいたします。

魔男さんは、金ぴかの女性が言いましたように魔法使いを仕事にしています。どのような魔法をお使いになるのかはおいおいわかりただけだと思います。助手に妖精の光子がおります。金ぴかねえさんは人形と間違えたようですが、光子の姿が見えたようですね。わたしのこれまでの観察によれば、これは「吉」です。おっと、あんまりしゃべりすぎてはいけません。

金ぴかねえさんは「まおとこ」と呼んでおりましたが、実際は「まだん」が正しい。魔男耕太郎は通り名です。本名は、情けない事に私も存じ上げません。

街の人が、郵便配達殺しと呼んでいる坂のてっぺんに大きな樫の木が街を見下

ろしております。その下に建つ古びた「ドーナツ荘」——街の人間は櫛の木の屋敷とよんでいます——に魔男さんは住んでいます。

街の人間はそこに「まおとこ」というふざけた名前の男が住んでいるのはしつておりますが、ナニモノなのか正確なところを理解している人は多くありません。そんなわけで、大人は子どもたちに「櫛の木屋敷で遊んじゃいけません」と言っております。それでも、子どもたちは放課後になると長い坂を駆け上って櫛の木屋敷に出かけてきます。櫛にはツリーハウスがあつて、格好の秘密基地になつていたからです。春先になると毎年の様に秘密基地の争奪戦が繰り広げられます。

ところで、なぜ魔男なのかと申しあげますと、魔女があつて魔男がないのが許せないからだとか、魔女狩りがあつて魔男狩りがないのは差別だとか、いろいろと申しておりますが、白タイツに虹色マントという「仕事着」ならいざしらず、普段の魔男さんは目立たない、はつきりいえば印象の薄いお人です。たとえ一時

間面と向かって話したとしても、別れた一〇秒後には、牛乳ビンの底のようなメ
ガネしか記憶ない、そんな人です。ようするに「魔男」とでも名乗らないと、魔
法使いに全く見えないというのが、本当のところではないかと、私は睨んでおり
ます。

さて――。

「お帰りにならないですか？」

「帰らないわよ。真夜中にわざわざこんなところまできたんだから。それとも魔
法で家へ送り届けてくれるの？」

金ぴかの女は、魔法のじゅうたんに虹色マントの男と二人腕のつて空を飛んで
いる光景を思い浮かべてふふと笑った。

魔男がじっと見つめている目に出会うと、まだ、笑いを含んだ声で言った。

「さ、まおとこさん、魔法を見せてちょうだい」

金ぴかの女性は、もたれていた椅子から背中を起こすとテーブルの上に腕を組んで、あごを乗せ、悪戯っぽい目で男を見つめた。

「耕太郎、この女、あんたに色目を使っているよ。いい歳してやる仕草じゃないよ。自分じゃ、必殺の眼差しとでも思ってるんじゃないの。ああ、やだ」

肩に乗った妖精の光子が言った。光子は大人の女の客にはどちらかというと冷たい。言うことばも辛らつだ。自分よりも綺麗な服を着ていたり、かわいかったりすると、働きぶりも悪い。若いだけと言うだけでも嫌う。もっとも当年二三九歳の光子にとって、自分よりも年上の人間なんているわけないのだから、言いがかりだ。

「それでは、お約束のものを、こちらへ」

光子のささやきを無視して魔男は言った。

女は、ドーナツを一個さしだした。

「あら、今日は珍しくストロベリークリームがかかっているのじゃないのさ」

光子が魔男の肩の上で言った。

「うるさい!!」

「あのさ、まおとこサン？ その肩にのつけた人形と腹話術なんかしてないで、早く魔法を見せてよ」

魔男は女の言葉を聞くと。ふっと笑った。妖精光子の姿が見えるということ
は、この女はその言葉と裏腹に、魔法も信じていれば、魔男にかける期待も大きい
ということだ。

「魔法を行う前にお尋ねいたしますが、あなたは魔法を信じますか？ 魔法使い
なんていないと思っていませんか？」

「信じているわよ。だって、こうして目の前にいるわけだし。五丁目のバー・リ
リーのママが、色男と結婚できたのも、七丁目の小料理屋の女将がしつこくま
わりつく男を撃退できたのも、みーんな、まおとこサンのお陰だって。櫛の木
敷には足を向けて寝られないって。それから、二丁目のゲイバーのママのアキラ

も……」

「わかった。もういい」

魔男は右手を一振りして女を黙らせた。それにしても街の飲み屋で夜な夜な「まおとこ、まおとこ」と連呼されていると思うと死にたくなってきた。

女は自分で聞いておいてなにさ、と魔男を見返している。

∞

まあ、この辺のやり取りは、お客さんとの間で毎度繰り広げられる「お約束」と言う感じです。

あ、ネズミの文蔵です。すこし間、失礼いたします。

今回の依頼者は、街の飲み屋街の住人、辻野文という女性。歳を聞いては失礼なので想像するしかありませんが、魔男さんの見立てどおり、五〇歳前後かと思われます。全身を貴金属で覆っているように見えますが、そのほとんどは「贗物」です。

依頼内容は「歩く貴金属」にも関わらず、男性が誰も言い寄ってこない。そればかりか、恋い焦がれている男性に見向きもされないというものです。諸兄、笑われるな。恋に歳は関係ないです。

依頼の手紙を受け取った魔男さんは、普通ですと、「魔男メモ」を片手に魔法の処方箋を書くのが習いなのですが、どういうわけか今回は妖精の光子を偵察に行かせました。

ひとこと申しあげれば、魔男さんは依頼を断るということはありません。白タイツに虹色マント姿の魔男さん本人を「見た」依頼者が断るケースはときたまありますが。世間には人を見る目を持たない人が多いようですな。

さて、偵察から帰って来た光子はぷりぷり怒っていました――。

「耕太郎、やめときな。あれはだめだ」

黄八丈に蘇芳染めの帯を締めた光子は椅子にドスンと座ると、ベッドに寝転

がっている魔男に言った。

魔男のおつかいで街に出かけるとき、光子は人間の女性に化けて——ではなくて、変身して出かける。妖精の息抜きだが、これがまた実に美しい。すれ違う人は目を止め、足を止め、ついで息を止めるほど。

いまはふくれつつらをしているが、切れ長の目、ほっくりと白い頬、瑞々しい淡桃色の唇、鼻筋は丸みを帯びて高からず低からず。小鼻がちよつときつめに張っているのが、おきゃんな妖精の面影を残しているといったところだが、美しさはいささかも減じていない。

「なんでだ？」

魔男は天井を向いたまま光子に訊いた。

「だってさ、いけ好かない女だよ。全身キンキラキンだ。まるで歩く宝石屋」
「妖精のくせに身なりで人を判断するのか。ようするに、自分よりきれいなものを着てただけだろう」

真実を言い当てられて、光子は頬を膨らませ、着物の帯をシュルシュルと解くと、魔男に投げつけて、妖精の姿に戻った。

——光子の報告を聞いた魔男さんは、「今回は買い物はいらない。夜になったら、依頼人を迎えに行つて来い」と言うのと、寝てしまいました。

真夜中前に起きた魔男さんは、コーヒーを沸かし、ドーナツを頬張っています。

それをみた光子はシブシブと言った態度で窓ガラスを通りぬけて街へ向かいました。光子は街で酔っ払って歩いていた女を見つけて櫛の木屋敷まで連れてきた。その間に魔男さんは、魔法使いの制服、白タイツに虹色マントに着替えて、依頼人の到着を待っていたというわけです。

おや、ちよつと長居をしすぎました。

さて——。

「それでは、これよりお望み通り魔法を行います。まずは。左手の薬指のメノウの指輪を外してテーブルにおいてください」

金ぴか女は、ローズピンク色の石の嵌まった指輪を顔をしかめながらかなり苦労して外した。外したあと指をフーフーと吹いている。

「耳のオパールをここへ。その次は、左手の中指のアメジスト、最後に左手薬指のエメラルドをここに」

女は内心、目の前の男を、そして男が行うという魔法を信じてもいいような気分になっていた。男が選んだのは、女の身体を飾る数多い宝石の中でも、数少ない本物だったからだ。

テーブルに並べられた宝石は、天井から下げられら裸電球の光を温かく反射して輝いている。

「メノウは対人関係を修復し、人間関係に起因する不幸から人を守ると言われて

います。このローズピンクは愛の象徴でもある。この乳白色のオパールは幸せを手中にいれる。このアメジスト、紫水晶は恋愛成就には欠かせない。そしてエメラルド、ビーンズに捧げられたという緑の輝きは、結婚を、豊かな人生を約束すると言われています」

「それだけのものを身につけていて、どうして男運がなかったのかしらねえ」
金ぴか女は腕組みして宝石をまじまじと見ながらつぶやいた。来し方が頭の中を行き交っているのだろう。

「さ、これを」

魔男は女の買ってきたドーナツを感慨にふけっている女にさしだした。

「あら、ありがとう。せっかくだけど、一二時過ぎたら食べないことにしているの」

「違う!! 食べるんじゃないくて、手に持ちなさい。……そうじゃない両手で差し出すように!!」

「うるさいわね。こう？」

「まず、メノウをドーナツの穴に通します。何が起こつても動かないように。寶石が穴を通過するときに、あなたの好きな人のことを念じてください。他の宝石の時もおなじように。いいですか？」

金ぴか女はこくりとうなずいた。

「光子、早くドーナツの穴の下に!!」

光子は気乗りしないふうに魔男の肩から降りて穴の下に入ったが、今日はかなり期待していた。なにせ宝石の輝きを身にまとうことができるのだから。

ひらひらと宙を舞ってドーナツの下に降り立った光子を、女はこれも魔法なのねえ、と感心の態で見ている。

魔男は光子がドーナツの穴の下に立ったのを見届けると、メノウの指輪を穴の上にかざした。

魔男は指輪を穴に入れた。女はそれが穴の下から出てくるものと思ったが、消

えてしまった。そのかわりドーナツの穴がホワッと明るくなった気がした。

「動かないで!!　せっかく集めたエネルギーが消えてしまっています」

魔男は指輪が消えたことに抗議しようとする女の口を封じた。魔男の額には汗がにじんでいる。真剣な魔男の顔を見て女は開きかけた口を閉じた。

∞

またまた、お邪魔いたします。ネズミの文蔵です。

魔男さんの魔法についてご説明申しあげます。

魔男さんは「色使い」の魔法使いと言われておりまして、色、光のエネルギーを集めて利用するというものです。

エネルギーを集める際に使うのが、ドーナツです。ドーナツならばなんでも良いというわけではなくて、ちょっと呪いがかった依頼の場合はビターチョコがかかっているものとか、今夜の依頼者のように恋愛成就の場合はスウィーティーなものをご用意されるようです。

どうして光のエネルギーを集める道具がドーナツなのかというと、魔男さんがドーナツ好きだから!!　ということもあるんですが、魔男さんによれば「ドーナツの穴は、そこに何もないわけじゃない。ドーナツがあつてはじめて存在する穴、逆もまた真であり、穴があつてドーナツが存在する。穴は確かに存在する空間なのだ。ドーナツを食べると言うことは、その空間も食すということ。何もないとここに空間を作り出すドーナツこそ、光の持つエネルギーを顕在化させるにふさわしい道具なのだ!!」というらしいですな。

集めた光をドーナツの穴に通す。通すことで光のエネルギーが目に見える物体——この場合つまり光子のことです——になって、それを使って人に影響を与えるのだというのが、魔男耕太郎の説明です。

なんだか、うさんくさい?　いんちきまじないみたいだ?

魔男さんがかつて妖精の光子にした説明では、「光は粒子、つまりは物質。物質を集めてそのエネルギーを使うのだから、サイエンスなのだ!!　まじないの類

いではない!!」というものでした。

もっと詳しく知りたいと思う方は、ドーナツを手土産に檜の木屋敷までどうぞ。ただし、檜の木屋敷までの坂道は運動不足の方にはお勧めできません。

さて――。

魔男は最後にエメラルドをドーナツの穴に通した。

エメラルドも穴の中に消えた。エメラルドの輝きが加わった穴の中の光は、シャボン玉のように色々な色を見せながら、まるで生きているように動いている。

光の玉が穴から抜け落ちて、徐々に光子を包む。光が光子に吸い込まれる様に消えると錦のドレスに身を包んだ妖精がいた。

「お、きょうはさすがに綺麗だな。この金色は指輪の台座の金だな」

光子が満足そうに自分のドレスをながめている。先日など、赤白青の斜め縞の

まるで床屋の看板のような服だったので相当オカンムリだった。

「魔法使いさん？ わたしの宝石はどこに消えたの？」

あっけに取られていた女が、大切な事を思い出したようにいった。

「宝石のエネルギーを吸いとったので、消えました」

「消えた？ そんな！ 全財産もっていつちまったの？ どうすんだよ！！ 返してよ。こいつが食ったのか？」

女は光子を握って逆さに振った。

「宝石の代わりにあなたは一人の男性の愛を手に入れられるんですよ」

魔男は静かに言った。

「そんなの信じられるもんか！！」

「信じろ！！」

逆さにされたままの光子が叫んだ。

「信じてみる！！ そのためにここへ来たんだろう。宝石なんてだれでも手に入

る。あんたはもっと素敵なものを手に入れられるんだ。世界中であんたしかもってないものを」

女は両手でつまんだ光子を顔の前まで持ち上げるとまじまじと眺めた。

そして光子の足を握っていた手を離れた。

光子は、あわてて手を差し出した魔男の掌に落ちた。

「あちち。宝石のエネルギーのせいかな、からだが重く感じるぜ、耕太郎」

女は目を見開いたまま泣いていた。川のような涙を流して。

女は魔男に宝石を取り上げられて、金ぴか度が三〇パーセント減ったが、その分、五〇パーセントは女ぶりが上がってみえた。涙が化粧を流し拭った顔は、ゆで卵のようにつるりと張りがあって綺麗だった。富士額の下にあるマスカラでけばけばしく見えた瞳は、ちょっと眠そうに見えるけど美しい二重。鼻筋は高く、口紅の落ちた唇は今にも微笑み出しそうな感じだ。

女は泣きじゃくりながら言った。

「みんなあたしのことを金ぴかとかいって避けるんだ。追いかければ追いかけるほど逃げて行く。今度だつてそうさ。なにもとつて食おうと言わうわけじゃない。好きなんだよ。心底好きなんだ。……いつからこんなことになったんだろう」

魔男はメガネの奥で目をしばたたかせると女に声をかけた。

「首にかけている。孔雀石を外して。それからブローチのアクアマリンとペリドットも、だして」

「なんだい、魔法は終わりじゃないのかい」

「サービスです」

「なんでも消してしまつてよ。こんな宝石、もうなんの意味もない」

魔男はもう一度ドーナツを女に持たせ、孔雀石を通した。

「あ、消えない」

「孔雀石は心の中のわだかまりを浮かび上がらせる力があるといひます。ほら、ドーナツの穴の中を覗いて。あなたの心の傷が映っているはずですよ」

女はドーナツの穴を覗きこんだ。光子も覗きたがったが、宝石のエッセンスを吸いこんだドレスが重くて飛びあがれない。

女は穴の中にぼたぼた涙を落とした。穴を通りぬけた涙は机の上にパールや水晶となって落ちてきた。よけそなった光子は頭に真珠の直撃を受けて顔をしかめている。

女はそんなことにはおかまいなく泣き続けた。両手ですくえるほどの宝石が積もったとき女は言った。

「そうだよ、この時から私は自分のことを人に知ってもらうことに臆病になった。心をさらけだして理解してもらうのが怖くなったんだ。だから、金ぴかに飾りたてて、気を引こうとしてきたんだ」

「余計なことかもしれませんが、今回の恋の相手は、ドーナツの穴の中の人に似ているのではないですか」

「似ているねえ。似ているんなんてもんじゃないのさ。本人なんだから。相手は

忘れているみたいだけどさ」

光子はやれやれといった感じで両手を持ち上げた。

「それではアクアマリンとペリドットを穴に通して」

魔男にいわれるままに女は宝石を穴に通した。今度は消えた。穴がほわっと明るくなった。

「さ、そのドーナツを食べて」

「アクアマリンとペリドットは何に効くのさ？」

「自分を表現する恐怖を取り除き、表面的ではない内面的な輝きを増します」

女は素直に食べた。飲みこむと涙をくいと拭って魔男に微笑んだ。

「さてと、魔法の仕上げですよ。この妖精を連れてお帰りなさい。途中、あなたの好きな男性の家の前に置いてください」

女は光子を両手に包む様にして持ち上げると部屋を出た。

「あ、ちょっとまって。忘れ物ですよ」

魔男は、机の上から女の宝石に変わった女の涙をかき集めて、女に渡した。

「ありがとう、まおとこサン」

光子が女の掌の中で舌を出して笑った。

∞

ドーナツ荘を出ると街の向こうが明るくなっていた。ザワザワと街が起きだした音が坂を上がって櫛の木屋敷まで届いてくる。

女が街に向かって坂を下り始めたころ、魔男はドーナツを一口にくわえたまますでに眠っていた。机の上には、女に渡し忘れた涙が一粒光っていた。

光子をマンシヨンの前に置くと、女は手を合わせた。

「まかしときなよ」

光子は女を見上げて胸を一つ叩いて言った。

「家に帰って早く寝るんだね。睡眠不足はお肌の敵だよ。あ、一つ言っておくけ

ど、今日の事は誰にも言うんじゃないよ。言ったら最後、効き目がなくなる。それにさ、まあとこじゃなくて、まだんだよ。恩人の名前を間違えちゃいけないよ。さ、お帰り。もう明るくなったから大丈夫だろう」

女はもうひとつ頭を下げると、まっすぐ背を伸ばし、まっすぐに街へ融けていった。

「さて、もう一仕事だ。夜勤手当を貰わなくちゃ」

そういうと光子はマンションの壁に沿って飛びあがった。男の部屋は五階だった。いつもならまっすぐに飛んでいくのに、今日は右往左往しながら飛んでいる。

ベランダの手すりにすがりつくように光子は止まった。肩で息をしている。

「ふー。やっぱり、重たいよこのドレス」

光子はガラスの中を覗いた。うっかり入ると、レースのカーテンに絡まった、猫に飛びかかれるからだ。透明なものは通りぬけられるのに、中途半端に

透けているものがだめだった。それにどういいうわけか、猫にだけは光子の姿が見えるのだ。

光子の姿がガラスに融けた。

部屋の中は薄暗かったが、男の居場所はすぐにわかった。いびきがすごい。

「うへ、耕太郎もいびきがすごいけど、こりゃ、まるでマシンガンだね」

光子は重たいドレスのせいでいつもとはちがつてアタフタと男の顔の上を飛びまわる。気を緩めると男の上に落ちてしまいそうなのだ。顔に近づきすぎて男のいびきに煽られてバタバタとあがって行く。

その間も光子の身体から、色彩彩の光の粒が男の上に降り注ぐ。

「それにしても、こういうっちゃなんだけど。恋は盲目ってやつだね。こんな男のどこがいいんだか。たしかこの街の恋愛キューピッドは、正之助の奴だ。酔っ払って矢を打ちこんだのじゃないのかねえ。今度あったら言ってやらなくちゃ」

光子はいびきを締め出すために耳をふさぎながら、せっせと男の上を飛び回

る。光の粒は男の身体にすうっすうっとなじりこんでいく。

はだけたパジャマからでてい男の腹に、最後の光の粒が吸いこまれて消えた。男はせり出しぎみの腹をポリポリと搔くと、寝返りをうった。光子の身体はもとの半透明に戻っていた。

「やれやれ。肩が凝ったよ。さ、帰って寝るとするか」

光子が窓ガラスから外に出ようとした時、部屋に差しこんだ朝日が壁に反射して、男の顔に当たった。

うつそりと目を開けた男は、窓ガラスをすり抜けて行く妖精を見たような気がした。

魔男の部屋に帰った光子は、眠りこんでいる魔男の顔を見下ろした。顔の横にはひしゃげたドーナツが一個。

「ま、どっちもどっちか。キューピッドの正之助に耕太郎のことも頼んでおなかちや。この広い世界のどこかに一人ぐらい蓼食う虫がいるに違いない」

光子は凝った肩を二、三度コキコキと鳴らすと自分のベッドにもぐりこんで眠った。

∞

魔男は昼過ぎになって、櫛の木のツリーハウスで遊ぶ子どもたちの声で目が覚めた。

それだけでなく魔法は体力を使うのに、夜通し働いたから疲れた。身体に力が入らない。コーヒーを沸かしテーブルに座ると、真珠を一粒見つけた。指で摘み上げると、日にかざししばらく眺めていた。やがて、光子が眠る淡青色の蠟石細工の小箱の蓋を開けて、いびきを掻いて腹を出して大の字で寝ている光子の顔の脇にそっと置いて、蓋を閉めた。

「昨日はおつかれさん」

街で唯一、坂の上の檜の木屋敷を憎んでいる人間、郵便配達がヒューヒュー言いながら、魔男に結婚式の招待状とどっさりのドーナツを届けたのは一週間後のことだった。

「どうするのさ、行くのかい耕太郎」

魔男はドーナツを一つくわえると、手紙をごみ箱に放り入れ、ベッドにごろりと横になった。

「行かないと、結婚式で、まあとこさんのご尽力によりなんて紹介されちゃうよ」

「知るか」

魔男は舌で器用にドーナツをくるくると回しながら言った。

(完)

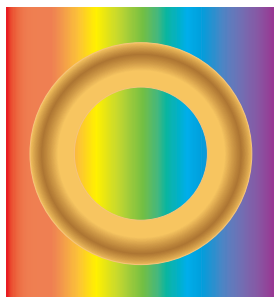
魔男耕太郎 2 色使いの魔法使い

2004 年 4 月 19 日 初版発行

著者 ぶんろく

発行 Bunroku's Factory

© Bunroku 2004



Bunroku's Factory 魔男
耕太郎2 ぶんろく
色 使 い の 魔 法 使 い
